

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 流王 貴義

本論文の目的は、フランスの社会学者エミール・デュルケムの初期の業績に注目し、それを近代社会構想という観点から再評価することにある。これまでの社会学史上での位置づけでは、デュルケムは『社会学的方法の規準』『自殺論』を主著とする実証主義的社会学の確立者と見なされてきた。それに対して本論文は、デュルケムが単なる社会の客観的観察の終始していたのではなく、当時の社会がかかえる問題状況を克服しようとする実践的問題意識を強くもっていた点を確認し、そこから『社会的分業論』やそれ以前の著作を検討することにより有機的連帯及び職能団体論の再評価を行っている。デュルケムに対する内在的な解釈史では、タルコット・パーソンズの影響の下で、『宗教生活の原初形態』に至る宗教社会学をもってデュルケム理論の到達点とする解釈が広く流布している。それに対して本論文は、有機的連帯を宗教研究へと移行する過渡期の概念と見るのではなく、それ自体独自の価値をもつ近代社会構想としての意義を明らかにしている。

第1章、第2章では、デュルケムに関する先行研究の批判的検討が行われ、これまで前期の学説が有していた社会構想としてのゆたかな可能性が見過ごされてきたことが論じられる。第3章では、『社会分業論』に登場する有機的連帯が単なる現実観察の結果ではなく、社会構想としての側面をもつことが確認され、第4章ではそうした問題意識に基づき「道德」概念を集中的に検討することで、デュルケムの社会構想の内実が宗教的な集合意識やそれによる直接的な自己本位主義の抑制にではなく、連帯を通しての個人の自由と社会統合の実現にあったことが確認される。第5章、第6章では「契約における非契約的要素」としての契約法と有機的連帯の規整メカニズムが具体的に検討され、「有機的連帯」に集約されるデュルケムの社会構想が、当時の労使対立のもとで経済的に相対的弱者にある労働者の地位を保証しつつ、調和的かつ安定的な社会統合を形成することにあつたことが明らかにされる。さらに第7章では、契約法にかわり重視された職能団体論の同時代的意義が有機的連帯の実効性の担保にあつたことが示され、また第8章では職能団体の内的な構造を解明することにより、それが国家の肥大化という当時のヨーロッパ社会の趨勢から個人の自由を保護する機能を有していたことが明らかにされる。

審査の過程では、後期デュルケムの宗教論を含めたデュルケム理論全体の発展史やデュルケムの社会構想に対する現代的評価が課題として残されるとされたが、本論文は学説研究として、先行研究で見過ごされてきた初期デュルケムの社会構想を膨大な思想史、社会史研究を踏まえ、その内実と同時代的意義を明らかにすることに成功しており、これらの課題は論文全体の高い評価をいささかも損なうものではなく、博士(社会学)の学位にふさわしい水準にあると判断された。